

特集

# 拡がる波、繋がる波、 漢方医学教育の 新たな波

KAMPO MEDICAL SYMPOSIUM 2010

● シンポジウム

● 特別講演

## 大学医学部教育の未来に向けた提言

● キーパーソンインタビュー

文部科学副大臣・参議院議員 鈴木 寛 氏  
岐路に立つ医療・医師養成  
閉塞する日本の医療は  
漢方で打開できる

● 特別インタビュー

厚生労働省 大臣官房参事官 塚原 太郎 氏  
統合医療プロジェクトチームが始動  
混在する情報を仕分け  
漢方を核に有効性を精査

漢方特集

Nikkei  
日経メディカル

<http://medical.nikkeibp.co.jp>

# Medical

5

May 2010  
別冊付録

2010年5月10日発行  
(毎月1回10日発行) 第510号



はあったが、学生たちからは想像以上に多彩な感想が寄せられた。

### 漢方へのイメージの変化に期待

一方、臨床実習を受講した学生に対して、指導医の立場から古田氏は、「5年生でBSL(Bed Side Learning)中であることを考え合わせても、臨床に対する意欲が感じられ、物事を素直に解釈できていると思った」と評価している。古田氏によれば、学生たちにとって漢方医学とは、およそ自分とはかけ離れた漠然とした存在との認識であったが、実習を受けたことにより、より身近で有用な医療との認識に変化したようにも感じられたという。さらに、「今後は漢方診療

の現場に飛び込んで見学するだけでなく、十分なディスカッションを行える時間も設ける必要があると思われる」と古田氏は指摘している。

われわれの実習では、毎日夕方にすべての学生に対してグループディスカッションを行っている。その中でプロフェッショナルリズム教育の1手法であるSEA(Significant Event Analysis)<sup>注</sup>を模したフィードバックも行っている。しかし一般診療の検討が中心になるため、漢方診療を振り返る時間は確かに不足しているのが現状である。

漢方診療の見学を導入して分かったことは、医学生の漢方に対するイメージは非常にあいまいであるということだった。西洋医学で対応できな

いところを補う役割、漢方薬と西洋医学との関連など、漢方医学についての知識不足および認識不足がその背景にあると思われる。

しかし、それが実際の漢方医の診療を見学することによって、科学的および歴史的に漢方を検証することの重要性が認識され、漢方診療のイメージも変化するのではないかと期待している。総合診療の教育者の1人として、そうした意識の変化が全人的医療、あるいは患者中心の医療につながっていくことを願っている。

**注)**SEA(Significant Event Analysis)：事例や症例を振り返り、今後の改善に対する考えを述べさせるという教育方法。

## COMMENTS

### 臨床で必要とされる漢方、基本的な知識を教えるべき

山形大学医学部第一外科主任教授 木村 理 氏



私は、第一外科の病棟責任者として、また昨年まで3年間医学部の教務委員長を務め、臨床・教育に携わっている。漢方には興味を持っており、医師になって30年来にわたって漢方エキス製剤を使用し、臨床上、確かに効果があると感じている。医局スタッフもほとんどが漢方を治療に用いているが、中でも「患者を何とかして治したい」という気持ちが強い医師ほど、漢方をより真剣に勉強しているという印象がある。

漢方は、臨床現場に出れば必ずといっていいほど必要になってくるので、漢方薬の「組成および適応」「薬理作用」「起こりうる副作用」等、基本

として知っておくべき項目については、学部教育の段階でしっかりと教えるべきだ。また教育に対する評価法も今後考えられていくべきであろう。

ただ漢方には、「どうして効くのか」がまだほとんどわかっていないという、大きな問題点がある。現代医学の中で認められるためには、今後引き続き漢方薬の薬理機序を解明するための研究を行っていくことがどうしても必要だ。昨年、その成果の1つとして、外科系トップジャーナルの『Surgery』誌に、大建中湯の作用メカニズムの臨床研究が掲載されたことは、非常にインパクトが大きかった。私は『Surgery』編集長のMichael.G.Sarr氏と、日本

肝胆膵外科学会の国際交流委員長としての活動を通じて旧知の親しい間柄にあり、このニュースにはひととき注目した。Sarr氏が漢方に理解を示したことで、その影響は世界に広がっていくに違いない。

現在、漢方に対する患者のニーズは非常に高い。漢方は、専門の訓練を積み深い知識を持った医師にしか使えないものではなく、我々臨床医にとってごく身近で有効性の高い治療ツールの1つである。したがって、ハードルを高くしすぎることなく、漢方を安全かつ有効に活用できるための教育を行うことが望まれるであろう。